

読む力をつける 国語教育 書く力をつける 国語教育

浮橋康彦先生は、昭和五十九年八月に、「読む力をつける国語教育」、「書く力をつける国語教育」の両著を上梓された。

浮橋康彦先生の国語教育研究への取り組みは、恩師である野地潤家博士が、「読む力をつける国語教育」の序に於て、「広島高等師範学校・広島文理科大学で学んだ著者浮橋康彦氏は、卒業後上京して東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程・博士課程（国文学専攻）に入學して、再び新たに近世文学の攻究にうちこむと共に、ほぼ一〇年間東京都立高校に勤めて国語科授業の実践的研究に熱心に従った。著者の豊富な授業実践の体験は、自己の国語教育論の展開に深くかわり、その授業論や教材論にも積極的に生かされている。」と、紹介されている。著者が、近世文学研究とともに、国語教育へ「熱心に」「積極的に」取り組まれた気魄は、「人間形成に培う

営みとしての言語教育」をめざし、表題に、

「読む力をつける」、「書く力をつける」と、直截的に冠したことからもうかがえる。

「読む力をつける国語教育」

本書の内容と構成は、著者によって、次のように説明されている。

I章（子どもを生かす国語の授業）は、国語科授業論である。子どもの発想や反応を生かし、授業の過程に組みこんで、全員一人残らず主体的に学習に参加するように、いきいきとした学習活動を目ざして、私なりの方策を求めた論考を集めた。

II章（「表現・理解の関連指導」）には、現在、国語教育の方法論として、広く関心を集めており、多くの考案がなされている「関連指導」についての、一連の論考を収めた。

III章（「文学と言語の教育」）では、文学

教育のあり方を、文学言語の可能性を土台として、言語の教育の視野の中で問うた。

IV章（「説明文の指導」）では、説明文指導について、説明文の機能と形成過程に着眼する読み指導の構想をまとめた。

V章（「言語の教育と読書指導」）には、言語の教育としての指導の着眼点と、読解・読書指導の新しいあり方を求める論考を収めた。

本書の特徴は、まず、「ゴルフ型限定選別主義」「野球型多様発言組織」（I章）等の斬新で的確な用語、「統合関係」（I章）等の（III章）、「言語的人間」（V章）と、学際的研究による用語が縦横に駆使され、△理解▽とは、「ことはを媒介にした情報のとり入れ」ではなく、「自分の内部に、ことばの活動によって思考を形成していく働き」（II章）等、従来の一般の通念、常識を打ち破る意欲的な概念規定でつらぬかれていることであろう。

次に、こうした著者ならではの用語や概念規定をふまえて、学習者全員の「授業進行過程への参加」のための「短冊カード」「感想の要点」分類一覧表、氏名付記の「発言摘記」

(I章)と、具体的な方法がいくつも発案されていることである。

さらに、こうした発案の根底には、日常言語から峻別される論理言語と文学言語に対する深い認識が示され、本著の二大領域の一つである文学教育論が形成されていることである。特に、文学教材論では、竹内芳郎氏、中村雄二郎氏、谷川俊太郎氏等、現代を代表する言語学者、哲学者、詩人の諸論が、国語教育の場で翻案され、効果的に援用されている。また、他方の領域の説明文の指導では、「創出過程に着目し、認識することは、実は、読み手の内部に説明文を創り出す潜在力を植えつけ、育てることにつながる」(IV章)という、「創出過程」論が示されている。

このように、本著では、文学教材論とともに、言語の教育と切り結び、かつ、現場で歓迎されるべき有力な教材論が提唱されている。

「書く力をつける国語教育」

浮橋康彦先生は、本著の目的・理念を、「子どもたちを、もっぱら情報の受け身である存在でなく、みずから事柄にかかわり、事柄の論理をとらえ、言葉を操って自分の考えを創

り表現する、言葉使いの主役に育てたいと思う。」(まえがき)と、述べられている。

本著の内容と構成は、次のようである。

第一章 作文教育の視点

一 「書く」活動を軸にした学習指導の諸方法／二 作文以前の作文指導を／三 気案に文章を「作らせる」機会を多く
第二章 作文教育の新しい試み

一 「一日一枚材料貯金」／二 二百字短作文の意義と方法／三 視写の意義と方法／四 会話写し作文の意義と方法／五 教室の言語環境を整える

第三章 作文教育の土台

一 国語科教育の中の作文教育／二 表現教材の本質と研究／三 文章の種類の種類的な位置づけ

第四章 作文の指導過程と年間計画

一 「授業モデル」形成の条件／二 作文の年間指導計画立案上の留意点／三 作文の特設的指導がなぜ必要か

第五章 読みの指導の開拓—作文指導の背景—

一 子どもを学習の主役にする授業の構成／二 こんな国語授業展開の力量をつけ

よう／三 国語科の発問／四 文学の読みにおける「大事なことば」とは／五 中心場面の読みの指導に関する五つの観点

本著の特徴は、「作文」以前のゆたかな掘り起こし(第一章)、国語科における作文教育の本質的定位置(第三、四章)、読みの指導との関連化(第五章)にあるが、わけても、書き下しの第二章に、著者ならではの、楽しく自分の考えを創り表現するための、具体的な方法論が展開されていることであろう。

一方、藤原与一博士の短作文論や倉沢栄吉教授の筆者想定法論との関係など、読者の課題も残るが、前著同様、著者にとらえた教育事実や体験に沿って、その方法・原理を読みとることが肝要であり、実践の場で具体的に活用されるべき良き指導書である。

「読む力をつける国語教育」

(A4判、二一ページ、昭和五九年八月、明治図書刊、二、四〇〇円)

「書く力をつける国語教育」

(A4判、二〇五ページ、昭和五九年八月、教育出版センター刊、二、五〇〇円)

(小森 茂)